

【研究ノート】

ジャック・ロンドンと危機の表象—*The Scarlet Plague*に見る ネットワークの断絶とアイデンティティーの問題

日影尚之

はじめに—ジャック・ロンドンと危機の表象

ジャック・ロンドン (1876-1916) の主人公たちはしばしば突然の危機に襲われる。*The Call of the Wild* (1903) では、カリフォルニアで豊かな暮らしをしていた犬の主人公バックが、突然誘拐され、北国の厳しい環境でそり犬として過酷な肉体労働に従事させられるが、労働を通じて本来の野生に目覚め、狼の群れのリーダーに成長する。*The Sea-Wolf* (1904) も、中産階級の文芸評論家ハンフリー・ヴァン・ウェイデンの乗るフェリー汽船が、突然現れたスクーター船に衝突され、下級船員の肉体労働者となるところから始まるものの、「男らしさ」のアイデンティティーを獲得する。また、ロンドン自身が、20世紀初頭の大英帝国の首都ロンドンのスラム街イーストエンドに潜入したルポ *The People of the Abyss* (1903) では、階級的他者の群れに呑み込まれそうな危機に直面しながらも、「男らしい」作家＝頭脳労働者としての階級的アイデンティティーを確認する (Howard 152-153; 日影 2001)。

このようにロンドンにとっての危機の表象は、階級的・人種的アイデンティティーを確立するフィールドであるが、そのゆらぎの可能性も垣間見える。例えば、日露戦争の最前線での取材体験では黄禍論よろしく、アジア人とは異なる自身のアイデンティティーを強調しながらも、時には自身と同じ白人男性 (ロシア兵) が異なる人種 (日本軍) の捕虜になったり、ロシア兵らしき白人の遺体が日本軍の荷台で運ばれたりする光景に遭遇して、白人の「男らしさ」という自己アイデンティティーに対する不安感をにじませる場面もある (London 1970, 106-107; Kim 175-180; Williams 140-144)。

また、ロンドンは1906年4月18日のサンフランシスコ地震の被災現場からのルポ “The Story of an Earthquake” (*Collier's* May 5, 1906) を書いており¹、圧倒的な破壊力、多くの避難民の列、危機の中で人びとが見せる共感と思い遣り、思い出の品を置いて避難せざるを得ない悲しみ (センチメンタリズム)、崩れ落ちる壁、立ち上る煙、押し寄せる炎などまるで「この世の終わり」のような光景が語ら

れる。焼け野原、混沌と破壊の光景は *The Scarlet Plague* の描写にも再現されることになる。もっとも、Cecelia Tichi (2015) も指摘するように、サンフランシスコ地震でのロンドンの体験は、そのさらに2年前の日露戦争の取材体験と重なり、アジアとサンフランシスコで見た破壊と暴力、勇敢さと死、共感と思い遣りの場面を心理的に消化するために2つの小説 (*Before Adam*と*The Iron Heel* のこと) を完成させる必要があった、とTichiは言う。

Creativity had its therapeutic uses for Jack. The horrors he saw as he angled his way through the city's flaming wreckage immediately put their stamp on the two novels he'd launched in Glen Ellen and Oakland before the quake. As the *Snark's* sailing date was repeatedly delayed, Jack vacationed and joined in lighthearted frolics with Charmian and their friends. With his ink pencil, however, he turned to the new fiction as a psychological necessity, desperate to make sense of what he'd seen in the Russo-Japanese War and then relived in San Francisco—the violence and destruction, the suffering, the cruelty and indifference, the wanton aggression, the futile gestures, the intermixed kindness and compassion and fortitude and courage and death. (Tichi 2015, 87)

ロンドンにとって危機の表象は、Tichiが上の引用でいう「暴力と破壊、苦しみ、残酷さと無関心、無謀な攻撃、無益な行為、そして優しさと思いやり、不屈や勇気や死、それらが入り混じった」危機的場面や光景に接近しながら、いかにその目撃者として証言する肉体的・精神的負担を背負い、いかにその体験を消化しながら伝達者 (語り手) としての役割を果たすのか、そのような語り手としての自己アイデンティティーを保つのが試されるフィールドである。

以下の本論では、ロンドンの中編*The Scarlet Plague*に注目し、危機の当事者としての語り手がその危機を表象す

際に用いるシステムの崩壊のイメージ、とりわけネットワークシステムの不具合としての表象のしかたについて検討し、そのような語り手を登場させるロンドンの作家アイデンティティーについて考察するものである。

1. *The Scarlet Plague* 概観

ジャック・ロンドンのSF小説*The Scarlet Plague* (1912年に*London Magazine*、1913年に*American Sunday Monthly Magazine*にそれぞれ連載、単行本としては1915年出版)は、科学技術が高度に発達した未来の地球で致命的な同名の病原菌が引き起こすパンデミックおよび文明の崩壊を描いた中編である。²この小説のほとんどの語りは、小説的現在2073年時点で87歳の老人、カリフォルニア大学パークレー校の文学部教授だったジェームズ・ハワード・スミスが、60年前の出来事を3人の孫たちに語って聞かせるというものである。作品によれば、アポカリプス後の地球では動植物も生き残った人類もすべてが急速に退化しているが、ロンドンは高度文明の崩壊過程を、社会システム(特に通信ネットワーク)の崩壊、身体やそのシステムの崩壊、スミスの「神聖な」教授職の系譜の消滅、言語(英語)の退化(特に洗練された書き言葉の喪失)などとして表象する。スミスの語りは、文明化した、洗練された英語と、退化した原始的な英語の両方を状況に応じて切り替えて話しているということになっている。老人が長々と語るのは、自分の存在意義を確認しているだけでなく、人類の知識が伝承・流通しなくなることを懸念しているからである。疫病により物理的、社会的、精神的、様々なレベルで既存の秩序やシステムが破壊されたが、災禍の当事者であるスミスは、いつか後世の人々が発見し、高度な文明を再興することを願い、洞窟に大量の書物を保管しているというものの、結局のところ人類の歴史は無慈悲な「宇宙の力と物質」の運動に支配されるものだと語り、宿命論を唱えたりもする。

Gina M. Rossetti (2015) も言う通り、この作品については、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期アメリカにおいて、特に都市に密集する移民を「侵略する病原菌」として表象し、人種的他者化していると読むのが一般的であり、筆者もその点に異論はない。ロンドンの人種差別意識や優生学思想、アングロ・サクソン優越思想³については、例えば、中国の人口膨張の脅威を細菌兵器で絶つ内容の短編「比類なき侵略」(“The Unparalleled Invasion” 1910)をはじめ、アングロ・サクソンの主人公夫婦がオークランドを出て、サンフランシスコ北の郊外ソノマ(ロンドン自身が農場を築いた場所)に理想郷を見つける旅を描いた長編*The Valley of the Moon* (1913) などでも顕著である。*The Scarlet Plague*のテキストには、世界の人口が増えれば増えるほど人口が都市に密集し、人口密集すればするほど、新しい細菌が発生するようになったとあるが、それは移民だけがその理由ではないが、南北戦争後のアメリカで急速に進展した産業化および都市化に伴う問題意識から、都市から田舎へという世紀転換期アメリカでの“back-to-nature”「自然に帰れ」の流れの作品でもある。都市中心部

を避けて郊外へと逃げる“white flight”(白人の脱出)の動きにも接続する。⁴

2. 精密なメカニズム(優秀なシステム)としての孫エドウィン

筆者が目する点の一つは、作品の冒頭、スミスとともに最初に登場する登場人物で、スミスのお気に入りの孫エドウィンの表象である。病原菌によるパンデミック後の退化した世界で、この少年は、物語中でほぼ一貫して、孫のなかで最も有能な少年として表象されている。森の中でスミス老人に進む先を案内するかのように先に歩くエドウィンは、手に武器として弓と矢を持っているが、突然、危険な動物が何か近くに感知したかのように警戒の様子を見せる。

As he went along he smelled things, as well, his distended, quivering nostrils carrying to his brain an endless series of messages from the outside world. Also, his hearing was acute, and had been so trained that it operated automatically. Without conscious effort, he heard all the slight sounds in the apparent quiet—heard, and differentiated, and classified these sounds—whether they were of the wind rustling the leaves, of the humming of bees and gnats, of the distant rumble of the sea that drifted to him only in lulls, or of the gopher, just under his foot, shoving a pouchful of earth into the entrance of his hole.

Suddenly he became alertly tense. Sound, sight, and odor had given him a simultaneous warning (*SP* 5-6).⁵

エドウィンの警戒は的中し、巨大な熊が出現するが、警戒と威嚇により2人とも無事に先に進むことができる。さらにこの後、エドウィンはウサギを矢で射止めたかと思うと、急な坂を下って反対側へ駆け上がるが、それはスムーズに機能するメカニズムとして表象される。“His lean muscles were springs of steel that released into graceful and efficient action.”「彼の引き締まった筋肉は鋼鉄のパネのようで、優雅で無駄のない動作に解き放たれた。」(*SP* 12)というエドウィンの肉体はMark Seltzer (1992)の言う“body-machine complex”「身体=機械複合体」であり、Tichi (1987)の言う効率的な機械(優秀なシステム)である。

このような精密なメカニズムやシステムは、ロンドンの著作に繰り返し登場する表象であるが、鋭敏な聴覚、視覚、嗅覚などを通して周囲の状況を把握し、それらの情報を素早く頭脳に伝達するネットワークとしてのシステムは、危機の場面でよりその力を発揮する。

3. ネットワークの断絶と世界の消滅(消失)

その上で、この作品において、謎の病原菌による予期せぬ、迅速かつ致命的な攻撃は、スミスの語る人類と社会に

どのような損害を与えたのだろうか。この致命的な病気は、ほとんどすべての人々を殺すだけでなく、社会の秩序をも失わせ、人類は高度な言葉（アルファベット）および知識を失ってしまうのである。この小説に描かれた未来では、飛行船、鉄道、新聞、無線通信、電話など、遠隔の交通およびコミュニケーション手段がしばしば言及されるのだが、緋色病のパンデミックによりそれらのシステムは機能しなくなる。中でもコミュニケーション手段の断絶は、スミスにとって世界の消滅（消失）に等しい出来事として表象される。

This we learned, by the despatches, until all order in San Francisco vanished, and there were no operators left at their posts to receive or send. It was amazing, astounding, this loss of communication with the world. *It was exactly as if the world had ceased, been blotted out.* For sixty years that world has no longer existed for me. I know there must be such places as New York, Europe, Asia, and Africa; but not one word has been heard of them—not in sixty years. With the coming of the Scarlet Death the world fell apart, absolutely, irretrievably. Ten thousand years of culture and civilization passed in the twinkling of an eye, ‘lapsed like foam.’ (SP 71) [イタリック筆者]

ジャック・ロンドン、Priscilla Wald (2008) の言う “the connections of human communities, which are conceived simultaneously on local, national, and global scales” 「ローカル、ナショナル、グローバルなスケールで同時に構想される人間社会のつながり」 (39) をシステムとして表し、緋色病がそのシステムをあっという間に破壊し、あらゆるつながりを断絶してしまったというのである。

また、同名の病原菌に罹った者の症状については、当人も気づかぬうちに心臓の鼓動が早くなり、体温が上昇し、顔や体に「山火事のように」赤い発疹が表れたかと思うと体が震えはじめ、震えがしばらく収まった後には、体の無感覚（麻痺）が足からしだいに上へと進み、心臓に達すると亡くなる、とされる。また、死体はあっという間に「分解」(“decomposition”) し、ばらばらになって飛んでいき、感染を広げるといふ。同様の症状は、スミスの大学の講義中にも起こる。スミスによれば、彼の講義中、教室にいたミス・コルブランという女子学生が緋色病の兆候を示し、15分後には亡くなったというのだが、その学生は下半身の脚から上半身の心臓に向かってだんだんと感覚を喪失（麻痺）して亡くなる様が語られる。

‘My feet! All sensation has left them.’

After a minute she said, ‘I have no feet. I am unaware that I have any feet. And my knees are cold. I can scarcely feel that I have knees.’

She lay on the floor, a bundle of notebooks under her head. And we could do nothing. The coldness and

the numbness crept up past her hips to her heart, and when it reached her heart she was dead. In fifteen minutes, by the clock—I timed it—she was dead, there, in my own classroom, dead. (SP 62-63)

このように身体のある部分から心臓に向かって感覚が麻痺していくというのは、身体システムの各部と感覚の中核をつなぐ回路の不具合、つまり接続や協調が失われるというイメージに近い。さらに、自分の目の前で犠牲者が出たこの件に直面したスミスは、そのときの自分について、自分も感染しただろうから、すでに自分は死んだも同然と思ったというのだが、その時の気持ちは病気そのものに対する恐怖というよりも、大学という彼の世界、代々教授を務めてきた「神聖な」系譜が緋色病によって途絶えてしまう事に対する憂鬱さだったという。

Everything had stopped. It was like the end of the world to me—my world. I had been born within sight and sound of the university. It had been my predestined career. My father had been a professor there before me, and his father before him. For a century and a half had this university, like a splendid machine, been running steadily on. And now, in an instant, it had stopped. It was like seeing the sacred flame die down on some thrice-sacred altar. I was shocked, unutterably shocked.

(SP 64)

ここでもまた、“a splendid machine” 「立派な機械」が、病気によって傷つき、動かなくなると表象されている。さらに、ニューヨークやシカゴのような大都市では、“All railroads and vessels carrying food and such things into the great city had ceased runnings” 「大都市に食料などを運ぶ鉄道や船舶はすべて運行を停止していた」 (SP 67) のであり、スミスが暴徒による略奪や放火、殺人など街の危険から身を守るために大学の化学棟に避難するため兄と電話で相談していると、“[The telephone] died in the midst of our conversation.” 「電話も会話の最中に止まってしまった。」のであり、“No more newspapers were being printed, so I had no knowledge of what was taking place outside.” 「新聞も印刷されなくなり、外で何が起きているのか全く分からなくなった。」のである (SP 75)。

このように、スミスの語りによれば、高度に発達した未来の地球で緋色病によって引き起こされる被害は、「優秀な機械」を停止させたり、コミュニケーションや輸送のネットワークを断絶してしまったりするものとして繰り返し表象される。

4. 家族の離散と分断

*The Scarlet Plague*では、社会の共同体がバラバラになり、例外的には利他的な行為が見られるにしても、基本的に各自が自分のために行動するようになる。また、社会を構成

する重要な紐帯としての家族—それは社会のネットワークの構成要素として位置づけることができる—は崩壊し、さまざまな家族間の別離が老いた語り手スミスによってセンチメンタル・モードで語られる。例えば彼自身、兄との別れを経験する。大学の化学棟に避難していた彼は、兄の顔に疫病の印が表れていることに気づく。兄は握手をしようとしたが、スミスは拒否せざるを得なくなり、兄も鏡で自分の顔を見てその印に気づき、「近寄ってはいけない。私は死人なのだから」と言ったかと思うと、痙攣が彼を襲い始め、足、ふくらはぎ、太ももの順に感覚の喪失を訴え、最後には心臓まで達して2時間かかって亡くなるが、最後の瞬間まで意識があったという (SP 76-77)。肉親との別離 (家族の分断) と体のシステムの分断・遮断がオーバーラップしている。

5. コミュニケーションの断絶—“To Build a Fire” (1908) および*The Sea-Wolf*との比較から

*The Scarlet Plague*で示された危機とそのコミュニケーション・システムの断絶としての表象は、他の多くの作品群の中にも見出すことができる。ここでは比較の対象として、ジャック・ロンドンの代表的短編の一つである“To Build a Fire” (1908) と*The Sea-Wolf*を取り上げる。前者は、北の大地で一人で進む名もなき男が、雪で火が消え、パニックに陥り、体のあちこちが「麻痺」し、「宇宙の寒さ」の中で意識を失う様子を、描いたものである。この作品についてChristopher Gair (1997) や折島 (2000) も指摘するように、ロンドンはこの男の身体を「コミュニケーションのメタファー」で表現している。⁶ “To Build a Fire”からの引用を見てみよう。

In his effort to separate one match from the others, the whole bunch fell in the snow. He tried to pick it out of the snow, but failed. The dead fingers could neither touch nor clutch. He was very careful. He drove the thought of his freezing feet, and nose, and cheeks, out of his mind, devoting his whole soul to the matches. He watched, using the sense of vision in place of that of touch, and when he saw his fingers on each side the bunch, he closed them—that is, he willed to close them, for the wires were down, and his fingers did not obey. (1310)

極寒の北国の雪の中、男は膝の半分まで足を濡らしており、凍傷による死の危険に直面し、体を乾かすために火を起こそうとするのだが、頬も鼻も指も凍りついて体の感覚は麻痺し、火を起こすための小枝を握るのに、自分の指が薪を持っているかどうか、目で見て確かめなければならない。語り手は電気通信の比喩を用いて、男の意識と彼の指先との間で電気配線が「ダウン (落ちて) いた」と言う風に、電子機器としての身体の接続に不具合が生じていると表象している。

また、*The Sea-Wolf*では、ゴースト号の独裁的な船長ウ

ルフ・ラーセンは、素早さと正確さを兼ね備えたその身体能力で、船内階級社会を支配していくが、小説の終盤、ラーセンが脳卒中を患い、文字通り倒れてしまう時、それは、電子機器システムの接続 (コネクション) の不具合として表象される。

He had received another stroke. He had lost his voice, or he was losing it. He had only intermittent use of it. As he phrased it, the wires were like the stock market, now up, now down. Occasionally the wires were up and he spoke as well as ever, though slowly and heavily. Then speech would suddenly desert him, in the middle of a sentence perhaps, and for hours, sometimes, we would wait for the connection to be reestablished. He complained of great pain in his head, and it was during this period that he arranged a system of communication against the time—one pressure of the hand for “yes,” two for “no.” (347)

脳卒中により声が出るように出せなくなったラーセンだが、声が出なかったり、一時的に声を回復したりする症状は、電気機器の配線が突然切れたり、つながったりする様子として、株式市場で株価が予測不可能に上がったり下がったり変動する様子として表象される。ひどい頭痛に悩まされながらも、彼は、意思伝達の方法として手を動かす回数で「はい」と「いいえ」を表す合図を編み出すのである。ラーセンは最終的に体が動かせなくなる (死ぬ) ようだが、“[His spirit] would flutter and live till the last line of communication was broken” (352) とあるように、その「魂」は「最後の通信手段が断たれるまで」動き、生きていたと表現される。

このような電子機器としての身体の接続不具合としての表象は、*The Scarlet Plague*において、緋色病による身体感覚の麻痺や解体、一定の秩序に従って機能するグローバルな輸送・通信ネットワークの断絶などの表象と重なり合う。⁷

結び—危機の表象と作家アイデンティティー

この作品の大部分を占めるスミスの語りには、ロンドンの作家アイデンティティーの形成に重要な危機の表象—例えば、クロンダイクの過酷な環境を舞台にした (白人男性の)「男らしい」冒険ロマンス、スラム街や戦地、自然災害現場の取材ルポ、資本主義による社会の分断・格差と階級闘争などがバリエーションの形で表れていると言えなくもない。高野 (2022) が指摘するように、緋色病がハンセン病と同じ比喩で語られているとすれば、*The Cruise of the Snark* (1911) をはじめとするロンドンの南太平洋作品群にも間接的に言及していると考えられる。また、緋色病によるパンデミックに乗じて反乱を起こす暴徒、銃撃戦、火の海、そのような大混乱の中でも垣間見える家族愛のセンチメンタリズムなどは、ロンドンの書いたサンフランシ

スコ大地震のルポ、*The Iron Heel* 後半における支配体制“oligarchy”と革命軍との緊迫した戦い、*Before Adam*における強力な武器をもつ“Fire People”による殺戮場面などもオーバーラップする。人類と細菌との戦いについてのスミスの語りには、例えば“armies of new germs emerged from [the micro-organic world] to kill men” (SP 51)をはじめとして、戦争のメタファーが使われている。⁸先述したように、緋色病からの逃走という名目で都市から田舎へ脱出するプロットは*The Valley of the Moon*などのソノマ作品とも共鳴する。つまり、*The Scarlet Plague*を通じてロンドンに、危機の表象に支えられた作家アイデンティティーを再訪し、再確認しているとも言える。

そのロンドンが*The Scarlet Plague*というSFでは人間の孤立やネットワークの断絶を描く。無論、作品執筆当時のロンドン自身が社会から孤立していたり、出版社や友人などとの連絡が断絶したりしていたりしたわけではないだろうし、スミスが作家ロンドンそのものというわけでもない。スミスは上流階級が支配するかつての格差社会をひどく懐かしみ、肉体的にも「男らしさ」からはほど遠く、ロンドンはある程度距離を置いてはいるので、ロンドンの作家アイデンティティーをどこに見るべきかは微妙な問題ではある。60年前の大惨事の生き証人としての彼のナラティブ（本人によれば、かつては需要が高かったが、最近はそのようではない）はRossetti (2015)に言わせれば、空しいフィクションと考えることもできる。その場合、人類の知恵（隠して保存している書籍）も後の世代に伝達・継承される可能性は必ずしも高くない。

スミスは、肉体が衰えていても、語りだけは続けていくようだ。*The Scarlet Plague*におけるスミスは肉体から離れた声（disembodied voice）だけのテキストと言ってもいい。スミス自身が自分の仕事は先人または同時代の別の学者の書いた本について話すことだと語っていたり（SP 39）、Soldervetzskyというおそらく細菌学者が先人の用語を応用して細菌の“the ‘abysmal fecundity’”「底知れぬ繁殖力」こそ生命の源泉かもしれないと呼んだこと（SP 51）、細菌学者たちの研究がグローバルなネットワークで進められていたらしきこと（SP 59, 68）などを考えると、声だけでは十分に伝達しきれない知識や技術や芸術を本＝書かれたテキストで伝達したいわけだが、伝達のネットワークはない。Jonathan Auerbachが特に初期のロンドンについて示唆するように、北国の真っ白のフィールド、ロンドンのクロンダイク作品群を象徴する「白い沈黙」における手紙（書かれたテキスト）の流通が、文学市場における作家ロンドンのキャリア形成とアイデンティティー確立に重要なメタファーであるとするならば、テキストを伝達するネットワークの断絶は、一定の地位を既に占めている作家にとってもネガティブなイメージだったかもしれない。⁹

この作品の幕切れ寸前には、野生化しているとは言えロンドンの好きな雄馬（stallion）の率いる20頭以上の馬の群れが海岸に突然現れるところをエドウィンとスミスが眺める。Michael J. Martin (2013)の言うように、スミスの語り相手の孫のうち、エドウィンだけは、最も優れたシス

テムとしての身体能力、青い目、スミスの語りに対する興味や理解力などあらゆる点で特権的に描かれている。大矢(2020)も示唆するように、冒頭ではエドウィンとスミスが、かつての鉄道の線路跡沿いにジャングルの小道を歩いて登場し、エンディングではまた線路跡の小道を歩いてジャングルに消えていくロード・ノヴェル風な終わり方はどこまでも続いていくイメージではある。さらに言えば、Martinは、1992年4月の*The New York Times*紙のインタビューでのコーマック・マッカーシー（1933-）の発言“The ugly fact is books are made out of books”¹⁰にも言及しながら、ロンドンの*The Scarlet Plague*がマッカーシーのピューリツァー賞受賞小説*The Road*（2006）に様々な面で影響を与えている可能性について説得力のある論を展開し、両作品とも未来については定かではないものの、希望がないわけではない点で共通すると述べる。¹¹

時代を超えたインターテクスチュアリティは、書かれたテキストのネットワークの一端を表している。

本稿は、Western Literature Association第53回年次大会における英語発表（2018年10月26日）および一部は地球システム・倫理学会 第16回学術大会（2020年11月14日）における発表内容に加筆・訂正したものである。

注

- レベッカ・ソルニット（2010）はサンフランシスコ地震の際の人びとの様子について、ジャック・ロンドンの記事にも言及し、すさまじい破壊とそれに続く街を覆う大火にもかかわらず、人々は全般的に冷静で礼儀正しかったことを強調し、ロンドンの文章を引用している（51頁）。サンフランシスコ大地震との関連については辻井（2001）493-495頁も参照。
- 辻井やJohn Hay（2017）も示唆する通り、ロンドンが作品の執筆時に意図していたわけではないが、結果的に見れば、ある意味で第一世界大戦の惨禍および1918年に始まった「スペイン風邪」を予告したような側面がある（辻井 477頁；Hay 367-369頁）。
- The Scarlet Plague*について優生学から論じた批評としてはEwa Barbara Luczak（2015）87-95頁参照。
- Christophe Den Tandt（1998）97, 104頁および日影（2007）参照。
- The Scarlet Plague*（以下SP）からの引用はSea Wolf Press（2018）からとする。
- Gair（1997）89-93頁および折島（2000）28, 72-76, 78各頁参照。
- Priscilla Wald（2008）は、グローバルな輸送・貿易ネッ

トワークの発達つまり世界の緊密なネットワークが病原菌やウイルスを知らぬ間に広げてしまうのだが、同時にそのグローバルなネットワークがあるからこそウイルスの正体を特定したり協力して対策を考えることができるという (8頁)。

8. 戦争用語を病気、特に癌の隠喩として用いる例についてはスーザン・ソントグ (2012) 68-73頁を参照。
9. Jonathan Auerbach (1996)、主に12-16、48-61頁を参照。Auerbachの主張は以下の通り。ジャック・ロンドンは、初期のクロンダイク作品において、白人男性主人公がアメリカ先住民やその土地を征服／植民地化するのと並行して、作家志望者として異国の地に入り込み、その物語を19世紀末のアメリカ文学市場における自分の商品として商標登録した。ロンドンのクロンダイクは執筆のフィールドであり、雪で覆われた荒野＝「白い沈黙」で荷物を犬ぞりで運ぶ行為 (遠くの前哨部隊に手紙を届けること) が繰り返し表現されるが、それは徹底した鍛錬と意志により白紙に印 (活字) をつける作業 (出版されるための闘争) であり、歩みを止めたり道から外れたりすれば雪に覆われて埋没 (死亡) する、「publish or perish」である。無名のロンドンは新しいフィールドに自分の名を刻みつけ、名前を確立しようとする自らの努力を、北の大地で自分自身 (アイデンティティー) を確立しようとする主人公たちの努力になぞらえている。社会階級から言えば周縁的 (マージナル) なロンドンは「自分の想像する問題のある社会的地位を修正しようと、ひたすら跡をつける作業に没頭する」のである。ロンドンは、作家見習い時代、執筆した作品を編集者や出版社に送り、拒絶され ... ということを繰り返しており、その詳細な記録までとっていたという。また作家志望の友人などとは手紙を通じて一種の共同体が構成され、そのメンバー間で印刷物を共有することが可能だった、という。
10. “Cormac McCarthy's Venomous Fiction.” *The New York Times on the Web* (April 19, 1992, Sunday, Late Edition)。
11. David Raney (2003) は、最終部に登場する海岸を進む野生馬の群れおよび波に打たれた岩場で野生のアザラシたちが吠える描写—“At close at hand, in the white waste of shore-lashed waters, the sea-lions, bellowing their old primeval chant, hauled up out of the sea on the black rocks and fought and loved.” (SP 150)—の “white” と “black” に注目し、アングロ・サクソンの再生を示唆しているという。
- Jane Fisher (2020) によれば、この小説は既存の秩序つまり富裕支配階級が社会を支配する世紀転換期アメリカの格差社会を批判している。また、致命的な緋色病の兆候として顔 (特に白い肌) にくっきり浮かぶ

赤い印、つまり死の宣告は、肌の色で運命が決まる人種差別 (白人優越) に対する皮肉だとする。とはいえ、ロンドンの態度 (“nihilism”) は社会改良や変化に対する希望は提示していないとする。

John Hayは主人公スミスの人物像について、たとえその動機に後世の名声や評価を得たいという欲望があるとしても、同時代までの教養や芸術 (スミスは英文科教授) を後世に伝えるためにせつせと本を貯蔵する行為は、作家の仕事にも重なる面があるとし、またロンドン作品の主人公像としては、圧倒的な力量で同時代に活躍する英雄というよりも、後世のためになる小さな行為を積み重ね、後の世代に託す「皮肉なヒーロー」像 “ironic hero” を見るができる、つまりロンドンの成熟を示すのではないかと言う。また、James Howard Smithのイニシャル JHSはJesusのギリシア語 ΙΗΣΟΥΣから (Christogram) の可能性も示唆している。

引用文献

- Auerbach, Jonathan. *Male Call: Becoming Jack London*. Duke UP, 1996.
- Fisher, Jane. “Apocalyptic Form in the American Fin de Siècle.” *Apocalypse in American Literature and Culture*, edited by John Hay. Cambridge UP, 2020, pp. 147-160.
- Gair, Christopher. *Complicity and Resistance in Jack London's Novels: From Naturalism to Nature*. Edwin Mellen P, 1997.
- Hay, John. “Jack London's Sci-Fi Finale.” *The Oxford Handbook of Jack London*, edited by Jay Williams. Oxford UP, 2017, pp. 355-372.
- Howard, June. *Form and History in American Literary Naturalism*. U of North Carolina P, 1985.
- Kim, Yung Min. *Children of Empire: Racial Romance in the Asia-Pacific Writings of Winnifred Eaton and Jack London*. Diss. U of Maryland, 2002. UMI, 2002.
- London, Jack. *Before Adam*, 1907. *The Works of Jack London*, vol. 9, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . *The Call of the Wild*, 1903. *The Works of Jack London*, vol. 3, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . *The Cruise of the Snark*. 1911. *The Works of Jack London*, vol. 16, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . *The Iron Heel*, 1908. *The Works of Jack London*, vol. 12, Hon-No-Tomosha, 1989.

- . *The People of the Abyss*. 1903. *The Works of Jack London*, vol. 4, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . *The Scarlet Plague*. 1915. Sea Wolf Press, 2018.
- . *The Sea-Wolf*, 1904. *The Works of Jack London*, vol. 5, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . “The Story of an Eye-witness.” Reprinted in *Jack London’s Tales of Adventure*, edited by Irving Shepard. Hanouver House, 1956, pp. 131-134.
- . “To Build a Fire.” 1907. *The Complete Short Stories of Jack London*, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III and I. Milo Shepard. Stanford UP, 1993, pp. 1301-1315.
- . “The Unparalleled Invasion.” *The Strength of the Strong*. 1914. *The Works of Jack London*, vol. 21, Hon-No-Tomosha, 1989, pp. 71-100.
- . *The Valley of the Moon*. 1913. *The Works of Jack London*, vol. 20, Hon-No-Tomosha, 1989.
- . *Jack London Reports: War Correspondence, Sports Articles, and Miscellaneous Writings*, edited by King Hendricks and Irving Shepard. Doubleday & Co, 1970.
- Luczak, Ewa Barbara. *Breeding and Eugenics in the American Literary Imagination*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Martin, Michael J. “American Crossroads: London, McCarthy, and Apocalyptic Naturalism.” *Studies in American Naturalism*, vol. 8, no. 1, 2013, pp. 21-37. <https://www.jstor.org/stable/26300819> Accessed 2020/07/12
- McCarthy, Cormac. *The Road*. Vintage International, 2006.
- Raney, David. “‘No Ties except Those of Blood’: Class, Race, and Jack London’s American Plague.” *Papers on Language and Literature*, vol. 39, no. 4, 2003, pp. 390-430. *Questia*. Accessed 2015/05/20
現在アクセスできるものThe Free Library by Farlex <https://www.thefreelibrary.com/%22No+ties+except+those+of+blood%22%3A+class%2C+race%2C+and+Jack+London%27s...-a0110587371> Accessed on 2022/07/18
- Rossetti, Gina M. “After the Plague: Race and Survival in Jack London’s *The Scarlet Plague*.” *Apocalyptic Projections: A Study of Past Predictions, Current Trends and Future Intimations as Related to Film and Literature*, edited by Annette M. Magid. Cambridge Scholars, 2015, pp. 61-77.
- Seltzer, Mark. *Bodies and Machines*. Routledge, 1992.
- Tandt, Christophe Den. *The Urban Sublime in American Literary Naturalism*. U of Illinois P, 1998.
- Tichi, Cecelia. *Jack London: A Writer’s Fight for a Better America*. U of North Carolina P, 2015.
- . *Shifting Gears: Technology, Literature, Culture in Modernist America*. U of North Carolina P, 1987.
- Wald, Priscilla. *Contagious: Cultures, Carriers, and the Outbreak Narrative*. Duke UP, 2008.
- Williams, Jay. *Author Under Sail: The Imagination of Jack London, 1902-1907*. U of Nebraska P, 2021.
- Woodward, Richard B. “Cormac McCarthy’s Venomous Fiction.” *New York Times on the Web*, 19 Apr. 1992, https://archive.nytimes.com/www.nytimes.com/books/98/05/17/specials/mccarthy-venom.html?_r=1. Accessed 2022/07/19
- 大矢健 “円環の宇宙。” 感染症が拡大し、中国が台頭する世界を予見！ ジャック・ロンドン『赤死病』, じんぶん堂 powered by 好書好日, 17 Sept. 2020, <https://book.asahi.com/jinbun/article/13732840>. 2022/07/19アクセス
- 折島正司 『機械の停止—アメリカ自然主義小説の運動／時間／知覚』 松柏社、2000年。
- ソルニット、レベッカ 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』 高月園子 訳、亜紀書房、2010年。
- ソクタグ、スーザン 『隠喩としての病・エイズとその隠喩』 富山太佳夫 訳、みすず書房、初版 1992年; 改版 2012年。
- 高野泰志 「比喩との抗い—ジャック・ロンドンの癩病表象」『アメリカ研究』 第56号、2022年、93-112頁。
- 辻井栄滋 『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く 大自然と人間—太古・現在・未来』 丹精社、2001年。
- 日影尚之 「イギリスのロンドンを書くアメリカのロンド

ン—ジャック・ロンドンの『どん底の人びと』 『麗澤大学紀要』 第73巻、2001年、15-33頁。

——. 「ジャック・ロンドンと消費文化— *The Game* と *The Valley of the Moon* の場合」 『麗澤レビュー』 vol. 13、2007年、60-81頁。